

患難期と教会（黙示録の終末論）

岡山英雄

一 患難期の重要性

千年期と患難期

キリスト教終末論においては、「千年王国」の解釈が議論の焦点となってきた⁽¹⁾。「千年の王国」は、キリストの再臨の前か後か、あるいは初臨ですでに始まっているのかなど、この問題はさまざまな角度から論じられ、すでに膨大な数の研究書が出版されてきた。たしかにこの問題は、神の国の現在性と未来性の理解に関わる重要なテーマである。しかし二千年の教会史を振り返るとき、議論があまりにもこの点に集中し、その陰に隠れて、もつひとつの、おそらくより重要な側面の考察が見落とされてきたのではないだろうか。その看過されてきた論点とは、終末的な神の民の苦難の時、いわゆる「患難期」の問題である。

「この期間について、黙示録は、一一～一三章で、三種類の表現において、五回言及している。

「四十二か月」（一・一・一三、一三・五）

「二六〇日」（一・一・三、一三・六）

「一時と二時と半時の間」（二二・一四）。

黙示録では三、四、七、十、十二などの限られた数字が、象徴的な意味を持って、繰り返し現れることを考えると、これは注目すべき期間である。（黙示録における数字の象徴性については R. J. Bauckham, *The Climax of Prophecy: Studies on the Book of Revelation* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1993) P.28-37. を参照せよ。）表現は異なっているが、これらの期間は、一年を三六〇日とするなら、「三年半」という同じ長さになる。そしてほとんどの注解者が認めているように、「これらは、ダニエル書の「ひと時とふた時と半時」（七・二五、一二・七）との関連から、終末における神の民の苦難を象徴する同一の期間を指している⁽²⁾。

黙示録によれば、これはキリストの来臨に先立つ神の民の苦難の時であり、それは一章から三章の記述にとどまらず、一七章から一八章の大バビロンの物語、また六章、八章から九章、一六章の封印・ラツパ・鉢の三つの災いと結びついて、四章から一八章全体に関わっている。「三年半」はまた、最終的審判に先立つ、三つの災いの部分的審判を通して、神が人間に警告を与える時であり、前触れとしての裁きによって、人々が悔い改め、神に立ち返る機会を与える時である。（これに対し、黙示録において、千年期への言及はきわめて少なく、二〇章の一節から一〇節に限定されている。内容の多様性、記述量の豊かさ、その独自性から考えても、黙示録において、「三年半」（一一～一三章）が「千年」（二〇章）よりはるかに注目すべき期間であることは明らかである。

進歩主義的歴史観

このように患難期は重要な期間であるにもかかわらず、千年期に比べて軽視され、その研究はこれまで充分になされてこなかった。その理由として、教会史において支配的であった楽観的、「進歩主義的」な歴史観があげられる。この歴史観が顕著になったのは、四世紀以降である。四世紀まで教会は、小さく弱く、ローマ帝国の圧倒的な権力の中で、少数者として、中傷され、迫害される存在であった。彼らは、自らがすでに患難の中にあり、やがてより大きな患難の来ることを知りつつ、殉教をも恐れず証言を続けた。彼らにとって、現実の悪の力を完全に打ち破るキリストの来臨は、切なる願いであった。

しかし四世紀初頭の大迫害の後、コンスタンティヌス帝のキリスト教公認、さらに国教化によって、事態は大きく変化した。教会は国家と一体化し、多数者となって、勝利し、世界を支配しつつ拡大し、神の国を地上で実現する存在となった。（J・モルトマン「神の到来 キリスト教的終末論」J・モルトマン組織神学論叢5「新教出版社、一九九六年、二二二～二二二頁を参照せよ。またこのような優れた分析にもかかわらず、モルトマンはこの書において、患難期について、全く言及していないことに注意せよ。）その結果、終末論も大きく変質し、キリストの来臨への切実な待望は失われ、地上の患難期は実質的な意味を持たなくなった。

このような進歩史観は、カトリック教会の成立と発展にともない、「公認」の見解となり、中世を支配し、また宗教改革においても、ルターやカルヴァンも終末論に関しては、中世の基本的な枠組みをほぼ踏襲した。またこの楽観的な歴史観は、「西欧」キリスト教社会による世界の「文明化」という植民地支配的な宣教論へと展開した。さらに近代の「啓蒙」思想によって、その哲学的な支持を得て強化され、また生物学における進化論の強い影響を受け、科学の発達にともなう「技術的ユートピア」（E・スフルマン「技術文化と技術社会」(すぐ書房、一九八四年)三〇

頁）への信仰と結びついていった。

千年期後再臨説

このように患難期を過小評価する傾向は、キリスト教終末論においては、千年期後再臨説において顕著である。この説によれば、教会の黄金時代、地上の「千年王国」の後、キリストが来臨する。(S. J. Grenz, *Millennial Maze: Sorting Out Evangelical Options*. (Downers Grove: Inter Varsity Press, 1992) P.65-90. を参照せよ。) 特におのれで、終末的患難に関する預言のほんたは、七〇年のエルサレム崩壊で成就したと断言する者がいる。(J. J. Davis, *Christ's Victorious Kingdom: Postmillennialism Reconsidered*. (Grand Rapids: Baker, 1986) P.114. を見よ。また D. Chilton たちの「リフトンストラクション運動も同様の患難期理解に基づいている。')^②「わたらのきわめて一面的な歴史観においては、来臨前の患難期が意味を持たなくなるのは当然である。しかし、この説は、オリフ山でのイエスの「苦難の日」についての預言、パウロの「困難な時代」についての警告（テモテ三章）、黙示録の「獣の国」との戦いへの備えを無視したものであり、偽りの「平安」に神の民を安住させるものである」(エレミヤ六・一四、一三・三一―一六)。

一九七四年のローザンヌ会議は、キリスト者の「社会的責任」の意義を指摘した点で、画期的なものであったが、終末論的な考察は十分とはいえない。とりわけ患難期や黙示録についての言及がほとんどないのは、ポスト・コンスタンティヌス主義を超えることの困難さ、また西欧近代キリスト教進歩史観の持つ限界を示していると思われる。

患難期における教会のあり方を研究することは、教会とは何か、世界とは何か、歴史とは何かを問うことである。一方、患難期を強調すると、歴史的な悲観主義、敗北主義に陥り、そのような逃避主義は「社会的責任」の放棄へとつながるとの批判がある。だが果たしてそうだろうか。むしろ楽観的な歴史観に安住し、地上のユートピアを夢見て、危機的な現状に目を閉ざすことこそ、幻想でしかない希望と偽りの平安に酔い痴れることであろう^③。患難期は現実であり、すべての時代の神の民にとって信仰のリアリティである。混迷を深める現代において、表面的な事象に目を奪われることなく、それを動かしているものの実体を見極め、その奥に潜む間の力と戦いつつ、なおそれを超えた勝利と希望に生きることこそ、教会が教会として地上に立てられていることの意義であり、真の意味でその「社会的責任」を果たすことであろう。

デイスペンセーションリズム

このように患難期が千年期に比べて軽視されて来た中で、患難期についての詳しい研究はデイスペンセーションリズムの神学者たちによってなされてきた。この神学は十九世紀半ば、イギリスの J・ダービィらによって唱えられ、二十世紀にアメリカでファンダメンタリズム運動と結びついて急速に広まった (Grenz (1992) p.91-125)。この神学は、預言の研究に力を注ぎ、聖書の歴史性を強調し、終末への関心を呼び起こしたという点では大きな意義を持つが、ひとつの根本的な問題をはらんでいる。それはその特殊な終末論、とりわけ「患難期前携拳説」である。彼らは、教会とイスラエルを峻別して、患難期に、教会は携拳されて天にあり、イスラエルは地上に残されるとする。この説に立つなら、いかに患難期の種々相を詳しく研究したとしても、それらはすべて、単なるカレンダー的興味から、世界歴史のこれからの動向を予測するという枠を抜け出すことはできない。なぜなら天に挙げられた教会にとって、地上の患難期は本質的に無関係であって、その結果、患難期と教会の関係、とくに苦難の中にある教会のあり方についての分析が全く欠落してしまっただけである。

患難期前携拳説が積義的に成り立ち得ないことに関しては、すでにラットとワルブートの一九五〇年代の論争があり（G.E.Ladd, *The Blessed Hope* (Eerdmans, 1966)）またその後 R. H. Gundry の *The Church and the Tribulation: A Biblical Examination of Posttribulationism* (Zondervan, 1973) と *The Rapture: Pre-, Mid-, or Post-Tribulationist?* (Zondervan, 1984) による優れた論文集も出版されているので詳細は省略するが（特にその中の D.J.Moo の論文 P.169-211 を見よ。）⁽⁴⁾ いくつかの重要な点のみを指摘するなり

- (1) 患難期前携拳説は、教会史においてきわめて歴史の浅い特殊な説であって、初代教会から中世、宗教改革を経て十八世紀に至るまで、このような終末論は存在しなかった。（近年この説には大きな変化があり、「漸進的ディスプレイーションナリズム」と呼ばれる説をとる者たちは患難期前携拳を不可欠のものとは考えない。）
- (2) 黙示録の記述のほとんどは、患難期にかかわるものである。患難の時代における神の民のあり方、警告と励まし、戦いと勝利などが、この書の主題である。（患難期前携拳説をとる者は、黙四・一で教会は天に携拳され、四章以下は地上に残されたイスラエルのためのものであるとするが（ワルブード）、現代の主要な注解者で、このような解釈を支持する者はいない。）
- (3) マタイ二四・一〜三三は、反キリストの出現、患難期、続いて再臨という終末的順序を示唆している。
- (4) テサロニケ二・一〜一二によれば、教会は、反キリスト（不法の人、滅びの子）の支配する患難期を通じて再臨の主に会う。「まず背教が起こり、不法の人が現れなければ主の日は来ない。」（テサ二・三）
- (5) 患難（*thlipsis*）の用例を見ると、患難は教会にとって避けるべきものではなく、教会の地上における本質的なあり方である（ロマ五・三、一テ、コリント四・一七）。（たとえばイエスの預言「あなたがたは世にあっては患難が

あります」（ヨハネ一六・三三）や、パウロの警告「私たちはこのやっつな苦難に会うやっつに定められている。」（テサ三・三）など）。神の民は「多くの苦しみを経て」（使徒一四・二二）、苦難によって煉られ、清められ、純化されて（詩篇六六・一〇、ダニ一・三五、ゼカリヤ三・九、マラキ三・二、三）神の国に入り、再臨の主に会う。

二 患難期と神の民

神の民の迫害

それではこの終末的患難の時、「三年半」とはどのような期間なのだろうか。黙示録によれば、その期間を特徴づけているのは神の民の迫害である。「四十二か月」（一・二、一三・五）とは「聖なる都」が異邦人によって踏みじられる時であり、また「海から上って来る獣」が活動し、全世界を支配する（一三・七）時でもある。黙示録はこの期間を、神に敵対する闇の力を四つのシンボル、「竜」（二二章）、「海の獣」（二三章）、「地の獣」（二三章）そして「大淫婦」（一七〜一八章）によって描き出す。

これらの悪の諸力を統括する「悪魔」は、「大きな赤い竜」として描かれるが、彼は天から投げ落とされ、「自分の時の短いこと」（二二・一二）を知って、激しく怒り、「女」そして「女の子孫」（神の民）に戦いを挑み（二二・一七）、自らの手で二匹の獣と大ハビロンを使って、彼らを攻撃する。

「竜」は「海から上って来る獣」に自らの「力と位と大きな権威」（一三・二）を与えるので、この「獣」は、神をけがし（一三・六）、聖徒たちに打ち勝ち、あらゆる「部族、民族、国語、国民」を支配する（一三・七）。この

「海の獣」は、政治的権力、軍事力による支配を象徴するが、「地から上ってくる獣」(一三・一二)は、「にせ預言者」(一六・一三)とも呼ばれ、宗教的権威による支配を表す。この「地の獣」は、「海の獣」の持つ権威を働かせ(一三・一二)、「さまざまな奇跡によって人々を惑わし」、「海の獣」の像を造らせ、それを礼拝させ、従わない者を殺させる(一三・一五)。またすべての人に、「獣の刻印」を受けさせ、それを持たない者の商品の売買を禁止する(一三・一七)。

また「海の獣」は「緋色」であり、「大淫婦」をその背に乗せる(一七・三)が、彼女は「大バビロン」(一七・六)と呼ばれ、地に住む人々を「不品行のぶどう酒」で酔わせ(一七・二)、地上の王たちを支配し(一七・一八)、商人たちを富ませるが(一八・三)、聖徒たちとイエスの証人たちの血に酔い痴れる(一七・六、一八・二四)。彼女は、経済的な繁栄と道徳的頹廃によって、偽りの陶酔と人々を誘い込む。

これら三者(獣、にせ預言者、大バビロン)は緊密に結びあって、根源的支配者である竜(サタン)の邪悪な目的を地上で達成するために、神の民を、政治的栄光、宗教的奇跡、経済的繁栄の三つの側面から誘惑し、攻撃する。(特に経済的側面については Bauckham (1993) P.388-383を参照せよ)。「竜」を含めたこの四者は、神に敵対する霊的存在として、その本質を同じくする。ハルマゲドンの戦いにおいて地上の王たちを集めるために、「竜、獣、にせ預言者」の口から出たのは、「かえるのような汚れた霊」しるしを行う悪霊どもの霊(一六・一三～一四)であり、倒された大バビロンは「悪霊の住まい、汚れた霊の巢窟」(一八・二)であった。「三年半」とは、このような悪の諸力が結託して、神の民を激しく襲い、迫害する時である⁵⁾。

神の民の保護

しかし激しい迫害の中でも、神の民は完全に守られる。「四十二か月」の間、聖所の「外の庭」は異邦人によって踏みじられるが、「神の聖所と祭壇、そこで礼拝している者」は、測りおたによって測られ、守られる(一一・一)。(また「女」の産む「男の子」(キリスト)が、彼を食い尽くそうとする「竜」から守られ神の御座へ引き上げられたように(一二・四～五)、「女」(教会)もまた、激しく追い迫る「竜」から逃れ、大わしの翼を与えられ、荒野へ飛んでゆき(一二・一四)、「神によって備えられた場所」で「二六〇日」の間(一二・六)、「一時と二時と半時の間」(一二・一四)、かくまわれ、養われる。キリストが神によって守られたように、キリストの教会もまた神によって完全に保護される。同じく、「ふたりの証人」(神の民)は、預言をしている「二六〇日」の間(一一・三)、「彼らに害を加えようとする者」の手から完全に守られる(一一・五)。このように神の守りは、迫害の中でも完全である。

神の民の証言

さらにこの「三年半」は、神の民が受動的に、迫害されたり保護されたりするのみならず、積極的に困難の中でも証言を続ける期間でもある。「ふたりの証人」の幻が、この側面を最も鮮やかに描き出す。彼らは、「二六〇日」の間、「二本のオリーブの木」、「二つの燭台」として、全地の主の御前で預言するが(一一・三～四)、証言のために、火によって敵を滅ぼし、天を閉じ、水を血に変え、災害によって地を打つ力を与えられている。彼らの証言は、邪悪な王アハブに対する預言者エリヤや、頑なな王バロに対する解放者モーセのような権威を、神から与えられている(一一・五～六)。また神の民は、「死に至るまでもいのちを惜しむことなく」、小羊の血と自分たちの「証言のことば」のゆえに「竜」に打ち勝つ(一二・一)。「竜」は、女の子孫の残りの者、すなわち「神の戒めを守り、イエスのあ

かし」を堅く保っている者（二・一七）と戦うが、彼らは屈することなく、「竜」の手先でもある「大バビロン」の迫害の中でも、「イエスの証人」（一七・六）としての生涯を全うする。このように「三年半」とは、神の民が迫害の中でも保護され、証言を続ける期間である⁽⁶⁾。

二 患難期はいつか

「三年半」の過去性

それでは「三年半」とはいつのことなのだろうか。それは、すでに過ぎ去ったのか、いま来ているのか、それともやがて来るのだろうか。この議論に関して最も重要なことは、これは必ずしも二者択一的な問題ではないという点である。「三年半」は過去、現在、未来のそれぞれに深く関わっている。このような「時」に関する理解こそが、黙示録の解釈、また聖書の終末論の核心にある。

まず「三年半」は過去のな性格を持つ。黙示録が執筆された一世紀末、著者のヨハネは、ローマ皇帝ドミティアヌス帝による迫害の中でパトモス島に流され、「イエスにある苦難」（一・九）にあずかっていた。また同じ頃、ペルガモのアンティパスは「忠実な証人」として殺された（二・一三）。忠実な二つの教会、スミルナとフィラデルフィアの教会はともに、ユダヤ人だと自称するが実はそうではない「サタンの会衆」によって、「ののしられていた」（二・九、三・九）。また第五の封印が解かれたとき、ヨハネは「神のことばと自分たちが立てたあかしのために殺された人々」（六・九）が天にいるのを見た。さらに海の獣、地の獣、大バビロンが、一世紀のローマ帝国の政治的、宗

教的、経済的側面を象徴していることは、多くの注解者が認めている。すなわち一世紀末、教会はすでに苦難の「三年半」の中にあつた。黙示録は何よりもまず、患難の中にある同時代のキリスト者を慰励するために書かれた。その意味で、終末的な患難の時は、ヨハネがこの書を書き記した時、すでに来ていた⁽⁷⁾。

「三年半」の未来性

またこの「三年半」は過去の苦難を指すとともに、未来の苦難をも意味する。終末において神の民を迫害する悪の力は、一般的には「反キリスト」（ヨハネ二・一八）また「荒らす憎むべき者」（マタイ二四・一五）、「不法の人滅びの子」（テサ二・三）、「海からの獣」（黙一三・一）などと呼ばれているが、彼は一世紀のローマ帝国の強大な国家権力を象徴するとともに、やがて来臨直前に現れる巨大な悪の力をも指し示す。黙示録一七章によれば、この「獣」は「今はいない」、「そして」やがて「底知れぬところから上つて来る」（一七・八）。この未来性は同じ節で再度強調されている。この「獣」は「今はおらず、やがて現れる」（一七・八）。また彼は、「七人の王たち」のひとりとしても描かれているが、この七番目の王は「まだ来ていない」（一七・一〇）。この「獣」は「三年半」の迫害の中心的な存在なので、「獣」の未来性はすなわち「三年半」の未来性を意味する。さらにこの「獣」は「竜」や「にせ預言者」とともに、全世界の王たちをハルマゲドンの戦いのために集めるが（一六・一、一六・一六）、これがキリストの来臨に先立つ、未来的、終末的な戦いであることは広く受け入れられている。すなわち黙示録は、執筆された当時の一世紀の困難な時代を「三年半」と見るとともに、未来の来臨直前の全世界的な迫害の時代をも「三年半」と呼んでいる⁽⁸⁾。

「三年半」の現在性

このように「三年半」は過去性と未来性の双方の要素を持つが、この期間はそれにとどまらず、もつとこの側面現在性を持つ。神の民の苦難は、一世紀や、来臨直前に限定されることなく、教会の全歴史を貫いて普遍的である。真の教会は、どのような時代にあっても常に患難の中にある。「三年半」を過去のあるいは未来的に解釈するならば、かなりの程度まで字義通りに、実際の三年半として理解することもできる。しかしそれを二十年近いキリスト教史と関連づけるなら、当然のことながら、「三年半」は文字通りではありえず、象徴的な期間となる。

「三年半」の現在性、全教会史との関係を強く示唆するのは、「ふたりの証人」が証言する期間としての「一二六〇日」（一・一・三）である。むろん、「ふたりの証人」は終末に現れるふたりの特別な人物と理解することもできる。（G. E. Ladd, 中）の註や採録。 *A Commentary in The Revelation of John*. (Grand Rapids: Erdmans, 1972) P. 154 を見よ。）この「三」の解釈を支持するものは少なく、むしろ彼らは「二」の燭台」とも呼ばれており、「燭台」は「教会」である（一・二〇）と説明されていることから、教会論的な理解がふさわしい（Beale (1999) P. 572-585）。とするなら、この「一二六〇日」は、地上に立てられた神の教会が、「世の光」として証言を続ける働きの全体を示していることになり、あらゆる時代の、教会の証人としての役割に関係している。

さらに患難（θλιψς）の用例（新約聖書で四十五回）は、未来の大きな患難が、現在の苦難と質的に連続していることを示唆する。やがて来る未来の患難を意味している用例は四回あり、それらはオリーブ講話において現れるが（マタイ二四・二一、二九、マルコ三・九、二四・二九）、他の四十回の用例はすべて、すでに起こっている患難を示し、また「陣痛」をも意味する（ヨハネ一六・二一）。すなわち終末の大患難は、初代教会が受けた、また全時代の教会の受けている苦難と、質的には連続している。来臨の前に、それまでは局地的であった迫害が、全世界的な規模に拡大し、かつてなかったほどに激化する。しかしその違いは、量的なものであって、質的なものではない。

「三年半」は、すでに来た過去の期間、来つつある現在の期間、そしてやがて来る未来の期間を意味している。「獣」は一世紀のローマ帝国であるとともに、世界史の中でたびたび現れた自己神格化した国家でもあり、また来臨直前の大患難期に現れる全世界を支配する反神的な権力でもある。「三年半」に象徴される患難とは、黙示録が書き送られた一世紀の教会の現実であるとともに、あらゆる時代において真の教会が地上で直面する苦難の総称でもあり、またその頂点としての来臨直前の全世界的な大きな患難でもある。神の国が現在性と未来性の二つの面を持つことはすでに詳しく論じられて来た。（G. E. Ladd, *The Presence of the Future: The Eschatology of Biblical Realism*. (London: S.P.C.K., 1974) P. 23-42, 149-170. を参照せよ。）しかし患難期の持つこのちみな多様な時間的側面については、これまでほとんど指摘されていない。（患難期前携筆説は「三年半」の未来性のみを強調し、また千年期後再臨説は「三年半」の過去性のみを強調して、それぞれ他の重要な側面を見落としてしている。）黙示録が書かれたのは、一世紀末、強大なローマ帝国の支配の中で、少数者として苦しむ神の民を励ますためであった。しかし同時に、それは困難な戦いのなかに生きる全時代の神の民を奮い立たせ、また終末の患難の時代に向けて、神の民を訓練し、整え、備えてゆくためのものである。

苦難から栄光へ

このように黙示録の終末論、いや聖書の終末論の核心にあるのは、患難期における教会のあり方への深い洞察に基づいた励ましである。患難期において、教会は迫害を受けるが、その中でも神の保護は完全であり、証言を続けて、殉教をも恐れることはない。また神の国と獣の国、光の支配と闇の支配、神の民の祝福と患難は、キリスト教終末論

を形成する二つの要素であり、双方を視野に入れることなくして、真に聖書的なダイナミックな終末論を構築することはできない。(H. Berkhof は鋭い歴史的洞察によって、両者の対照の重要性を指摘している。Christ the Meaning of History. (1962) Tr. by L. Buurman (Grand Rapids: Baker, 1979) P.101-177.) 混在しつつ成長し続けていた「麦」と「毒麦」(マタイ三・三〇)は、収穫の時を迎え、それぞれの本質的な特徴をあらわにする。最終的な「刈り取り」を前に、神の国と獣の国が鋭くせめぎあい、光の国と闇の国との戦いが激化し、その究極の姿を明らかにする。とくに来臨前の患難期において、両者はその相違を明確にし、地上の民は、神の民と獣の民とに二分されてゆく。獣の民は、大バビロンの不品行の「黄金の杯」(黙一七・四)から飲み、「獣の刻印」(黙二三・一六)を受け、神の民は、キリストの血による「新しい契約の杯」(コリ一・二五)から飲み、生ける「神の名」(黙三・一二、二二・四)を額に記される。

イエスが十字架の苦難を経て、復活の栄光を受け、天に着座されたように、キリストの教会も、地上の患難を通じて、栄光に輝く天のエルサレムの門をくぐる。「三年半」の苦難において、キリストの十字架の苦しみにあずかった者が、「千年」の祝福、キリストの復活のいのちにあずかる。神の民が地上で受ける「今のときの軽い患難」は、やがて天の「測り知れない重い永遠の栄光」(コリント四・一七)へと変えられていく。

やがてキリストの来臨によって闇の力は完全に滅ぼされ、すべてが新しくされ、神の栄光のみが輝きわたる。しかし主の来臨までは、「三年半」の間、一時的に獣の国が勝利し、支配しているかのように見える。それゆえ神の国は、再臨までは、地上において、小羊の王国、苦難の王国として逆説的に表される。苦難と結び合わされた王国、パトモス島で、ヨハネは、まさにその王国の真実を知った。

「私ヨハネは、あなたがたとともに、イエスにある苦難と王国と忍耐とにあずかっている。」(黙一・九)。

暴力化が進む現代において、患難期の研究、特に患難期と教会との関係の終末論的考察は、急務であるにもかかわらず、特殊な神学と結びついた終末論や、世界の「進歩」を信じる楽観的歴史観の影響によって、軽視されてきた。その結果、日本のみならず、世界でも、この問題に関する本格的な研究はまだなされていない。しかしキリスト教終末論の最大の課題とは、患難期における教会のあり方を明らかにすることであろう。二〇世紀後半、日本の教会、特に福音派は、アメリカのファンダメンタリズム運動の特殊な終末論の強い影響下にあった。また一方では、ポスト・コンスタンティヌス体制に貴かれた、「西欧」近代キリスト教「文明」社会の思想にも深く影響されていた。しかし新しい世紀を迎えようとしている今、もはやこのよつな過去の「神学」に囚われることなく、終末に関する聖書の警告に真剣に耳を傾け、患難期の研究を深め、それによって、日本から世界へ、独自の神学を発信することが、求められているのではないだろうか。

注

- (1) この論文は二〇〇〇年五月、イギリスのセント・マンドリューズ大学に提出し受理された。黙示録の神学に関する学位論文 *Troty in Revelation: the Paradox of the Lamb's Kingdom and the Parody of the Beast's Kingdom* (全七章) の第六章「千年期と患難期」の一部(特に一節と四節)を要約し、加筆したものである。(脚注の多くは省略した。)
- (2) G. B. Caird, *The Revelation of Saint John*. BNTC. (Peabody: Hendrickson, 1966) P.159. イスマエルの歴史においては、エリヤの祈りに応ずるアハブ王の時代の「三年半」のききと(一列一七・一、一八・一、ルカ四・二五、ヤコブ五・一七)や、シリアの王安ティオコス・エプファネスによる前一六七年からほぼ「三年半」に及ぶ神殿の冒瀆などとの関連が考えられる。この点に関して G. K. Beale, *Commentary on Revelation*. NIGTC. (Grand Rapids: Eerdmans 1999) P.565-568. を見よ。

- (3) 「反キリストのイメージは、あらゆる種類の進歩的ユートピア主義と真つ向から矛盾する。それは全人類の歴史の共通の未来を、最終的に実現されるパラダイスとしてではなく、遂に完成されるバベルの塔、人類の最も邪悪で、偶像礼拝的な性向のグロバリゼーションとして描き出す。」 R. Bauckham, and T. Hart, *Hope Against Hope: Christian Eschatology in Contemporary Context* (Darton: Longman and Todd Ltd, 1999) P. 114.
- (4) G. L. Archer は、この書の中で、患難期中携筆説(患難期を前半と後半に二分し、キリストはその中間点で再臨するという説)を主張しているが、この立場を取る者は「ごく少数であるの」(この)は論じない。
- (5) 注目すべきことに、竜、海の獣、地の獣、大淫婦の四者は、神の国を模倣している。特に初めの三者は、それぞれ父なる神子なる神、御霊(によって靈感された「ふたりの証人」)に対応しており、多くの注釈者によって「悪魔的三位一体」と呼ばれている。さらに「大淫婦―大バビロン」と、「聖なる花嫁―新しいエルサレム」とは「女性―都市」として鮮明に對比されている。
- (6) またこの迫害・保護・証言という三つの要素は、黙示録のみならず、オリーブ講話においても顕著である。「いまだかつてなかったような苦難の日」(マタイ二四・二二)に、神の民は苦しみに会い、「憎まれ、また殺される」(マタイ二四・九、ルカ二二・一七)。しかし迫害の中でも神の守りは完全であり、「髪の毛一筋も失われることはない」(ルカ二二・一八)。神の敵は、たとえからだを殺すことばざても魂を殺すことはできない。さらにこの迫害の時は、神の民が「証言をする機会」(ルカ二二・一三)となり、福音が「全世界に宣へ伝えられて、すべての国民にあかし」される時となる(マタイ二四・一四)。すなわち終末の患難の日に関して、黙示録の幻と福音書の預言とは、表現の形式は違っても内容において深く結び合わされている。
- (7) 書簡の著者ヨハネも同様な終末観を示している。「今や多くの反キリストが現われています。それによって、今が終わりの時であることがわかります。」(ヨハネ二・一八)。

(福音教会連合・東松山福音教会牧師)